

伊藤博文書

【訓】

大地球中東海の隈、三千余歳帝闇開く。纖塵未だ犯さず神靈の地を、自ら称す東瀛の小蓬萊と。上古未だ聞かず開鎖の論、祖宗の宏謨氣宇恢なり。長きを執り短きを補ひ遺法に即したがふ、四海仁に帰すること子しらべ來ひどに齊し。武門の擅せん横何ぞ説くに足らん、神皇の偉略何ぞ美なるかな。西歐輓近研智の術、電線火輪もて万里も縮む。文明を誇唱し利功を専もつぱらにす、船車到る所詭譎きけつを逞たくましうす。誰か活眼を放ちて全球を觀ん、安いすくんぞ識らん玉帛の戈矛に非ざるを。和親侵略兵力を伴ふ、一朝相反すれば恩讐おんあだと化す。宇内の大勢已に此くの如し、今上きんじょうえいめい叙明ゆめいにましまして大猷たいゆうを定めらる。励精治を図りたまひて寧日無く、三十余年慙しばらくも休まれず。民を教へ才を育て祖業を紹つぎたまひ、國光漸く正に五洲に耀かがやかんとす。曷なんぞ料はからん北門に忽ち釁たちまを啓きんくを、兩翼既に伸ぶ韓満の地に。陰風慘澹として雲くもよも四に翳かげる、曠日手を空むなしくせば金甌きんとう危からん。宣戰の大詔天より降り、三十万軍水天に浮かぶ。王師海を渡りて已に五月、前鋒嚮むかふ所旂旒きりゆうを翻す。進みて全捷を期すは日を計るに堪たえん、元帥選に膺あてらる大山侯。鍼えつを授けられ征を専らにし魏闕さいけつを辭す、平生の研鑽子房の籌。勝算胸中に成竹有ならん、妖氛ようふん坐そぞろに覺ゆ豁かつこう昊ときの秋。須すべらく期すべし敵を破り歸り來たるの日、百戰功就なり宸憂しんゆうを除くを。東洋平和此れより始まる、盛名青史せいしに千秋を照らさん。

明治甲辰六月、古風一首賦して以て大山満州軍總司令官を送り、其の行を壯えいにす。
今復た需めに応じ、再び茲こに錄す。

【注釈】

大きいなる地球上の東海のすみで、三千年余り続く帝の門戸が開かれた。神靈がいる地は、いまだわざかな塵にさえ侵されたことがなく（外国からの侵略を受けたことがなく）、みずから東海の小蓬萊と称している。古くから外国との交易を行うといった議論は聞いたことがないが、歴代君主の計略は偉大で、見識は広かつた。（諸外国の）長所をとり入れ、短所を補い、それらは古くからの法律・制度に即している。天下は帝の仁政に服従しており、それは子が親を慕うようである。武門（徳川幕府）の横暴なふるまいはあえて説明する必要もないが、天皇の偉大な計略の何と立派なことであるか。

ヨーロッパは最近知の技術をみがき、電信線や汽車でもって万里（の距離）を縮めている。（自らを）文明であると誇大に主張し、利益や功績をほしいままにしている。船や鉄道はいたるところで怪しい動きを盛んに行っている。誰が物事を見ぬく力を發揮し、全世界を観てているだろうか。どうして玉と綿織物（貿易などの平和的手段）が武器（武力的手段）でないと認識できるだろうか。

世界の大勢はすでにこのような状況であり、今上（明治天皇）はすぐれた英知で大きな計略を定められた。内政を治めることに尽力していたため、やすらかな日はなく、三十年余りもの間休むこともなかつた。民衆を教育し、才能ある人物を育て、祖先の開いた事業を継ぎ、国の栄光はようやく、今にも輝こうとしているところだつた。

（そうしたなか）にわかつに思いがけず、ロシアとの戦端が開かれ、すでにロシアの勢力は朝鮮・満州に及んでいる。北風は薄暗く、雲が四方を覆つていて。始終何もせずに手をこまねいていれば、外国の侵略を受ける危険がある。宣戦の大詔が天皇よりくだり、三十万の陸海軍が海に浮かぶ。天皇の軍隊が海を渡つてすでに五月、前鋒が向かうところ、旗がひるがえつていて。進撃して全勝を期す望みはもう間もなく達せられることだろう。元帥に選ばれたのは大山巖侯爵。大山侯は天皇より征討の命を受け、遠征に専念するため朝廷をあとにした。常日頃より研鑽をつみ、中國古代・漢の軍師であつた張子房のごとく謀に長けている。胸の内では十分な勝算の見通しがある一方で、この大空が広がるときに、悪い予感もなんとなしにあるだろう。ぜひとも敵を破つて帰還し、百戦の功績を遂げて天皇の憂慮を取り除いてくれたまえ。東洋の平和はこれより始まる。（貴方の）立派な名声は歴史に長く輝くだろう。

明治三七年六月、古風一首を作り、大山満州軍総司令官に送り、その旅立ちを盛大にする。今まで求めに応じ、ふたたびここに記す。

侯爵 伊藤博文

（訓読は吉田茂記念事業財団編『人間吉田茂』中央公論社、一九九一、栗原健「大磯・吉田茂元総理邸訪問記」付記一による。注釈も上記の書を参照。）